

地域の子ども支援者が発見する 子どもの SOS とその支援 —学校等との連携の実態—

○吉永真理（昭和薬科大学）
小泉令三（福岡教育大学）

重根美香（一般社団法人 子ども安全まちづくりパートナーズ）

キーワード：地域、子ども支援者、子どもの SOS

はじめに

文科省は H24 に「学校における子供の心のケア：サインを見逃さないために」と題した指導参考資料を作成した。その中で学校外の連携先である「地域」については自治会、民生委員、学校評議員が「地域資源」と定義された。現在、地域には多様な相談機関や支援活動があり、プレーパークや児童館などさまざまな地域における子どもの居場所において、見出される子どもの SOS の事例は多くある（吉永・重根，2016）。最前線で子どもの気持ちを受け止め、危機介入も行なわれているが、公的機関との連携は不十分で、支援者の不安も大きく、救われる子どもの数にも限界がある。子どもにとって信頼できる SOS 支援者養成のためにも、どのような地域の支援者が子どもの SOS を見出し、支援したり、学校等諸機関と連携しているかの実態把握は急務である。本研究では、支援者の属性に着目しながら、支援と連携の実態を把握した。

方法・対象

首都圏の二か所で実施された研修会のあとに、地域での支援者 122 名を対象に、質問紙を配布し、回答してもらった。質問項目は回答者の属性（所属先、子ども支援の経験年数）、子どもの SOS の内容、連携先、支援事例において成功した対応の内容である。有効回答数は 116 名となった。

結果と考察

1) 支援者の属性

回答者の所属先は児童館、児童クラブ、保育園の他主任児童員、子ども家庭支援センター、プレーパーク等であった。勤務年数は 1 年が 19%だった一方、10 年以上も 17.2%となり、5 年以上の比較的経験が豊富な支援者が 4 割を占めた。子どもに関わる仕事をしている期間は、10 年以上が 50%、5 年以上が 7 割以上となり、経験豊富な対象者が多かった。

2) 勤務年数・支援年数と SOS 発見経験

表 1 に示したように、支援年数の長さは SOS 発

見経験に関連していた。支援年数が長いほど過去 5 年間の SOS 事例の経験数は多くなり、家庭や学校と連携した経験事例数も多くなる。連携できるかどうかは、支援者が子どもや親にとって信頼できる存在であり、日頃から地域において支援者・機関の間の情報共有・それぞれの専門性についての共通認識の保有・役割分担が十分なされているかに関係していることがうかがえた。

表 1. 子ども支援の年数と SOS 支援の経験

	5 年未満	5 年以上	χ^2 値	p
①	24	54	2.0	
②	23	63	0.0	
③	26	70	0.0	
④	16	62	4.7	<0.05
⑤	11	37	0.6	
⑥	6	38	5.7	<0.05
⑦	3	13	0.6	
⑧	19	51	0.0	
⑨	14	63	8.5	<0.01
⑩	7	46	9.1	<0.01
⑪	10	52	7.6	<0.01

①子どもの様子から誰かに虐められている感じがわかる子ども②他の子どもをいじめる子ども③落ち込んだり、急にはしゃいだり、心理的に不安定な子ども④親とうまくいっていない子ども⑤虐待のサイン（あざや傷、ネグレクトによる汚れや欠食）がある子ども⑥不登校や不登校傾向だが居場所には来られる子ども⑦自傷行為（リストカット等）をしている子ども⑧子どもから自分の悩みについて相談される⑨家庭から子どもについて相談される⑩学校の先生から子どもについて連絡や相談をされる⑪家庭から発達の問題を抱えた子どもについての相談をされる

表 2. 子ども支援の年数と連携の経験

	5 年未満	5 年以上	χ^2 値	p
同僚・上司	24	71	0.6	
同職・別職員	6	31	3.1	
役所	2	20	4.3	<0.05*
役所担当課	2	11	1.0	
児相	1	17	4.9	<0.05*
学校	7	38	4.7	<0.05
保護者	6	28	2.0	
親族	0	8	3.1	
保健所	1	5	0.4	
子家セン	4	29	5.0	<0.05*
病院	1	8	1.2	

*Fisher の直接法

文献：吉永真理、重根美香：地域における子どもの SOS 発見と支援の実態：事例を通じた検討，コミュニティ心理学第 19 回大会，栃木，2016/6